

若狭地方に現存する能の舞台の造形

横 山 勉*

A study of the formative elements of the existing Noh stage in the Wakasa region

Tsutomu Yokoyama

This paper aims to discuss the architectural culture of Noh in the Wakasa region through the formative elements of the existing Noh stage. The Noh stage is one of the formative elements in Japanese culture based on Japanese arts for the living, and lots of Noh stages belong to the shrine. In the Wakasa region taking a great interest in Noh, from the Shinji Noh, lots of fine Noh stages remained. The discussion clarified the characteristics of these Noh stages.

1. はじめに

若狭地方には演舞場としての舞台を配している神社が数多くある。元来、神に舞いを奉納するために設えられたものであるが¹⁾、人々の生活芸術と結びつき、生活のハレの場のひとつとして位置付けられ、舞台が整えられてきた。この地方では神事能²⁾をはじめ能に関心が高く、立派な能の舞台が残されている。しかし、今日では、生活環境の変化と共に演舞場としての機能が薄れ、その建物の多くが荒廃に直面している。能の舞台は日本の生活芸術を基盤とした日本文化としての造形表現のひとつであり、武家の式楽としての能の舞台³⁾がある一方で、若狭地方にはその多くが神社に付属する形式で存している。それらの造形を通してこの地方の能における建築文化を論及することを目的とし、今回は若狭地方の神社に付属する能の舞台の実測調査を中心としてその概要を報告するものである。

2. 現存する若狭地方の能の舞台

現在若狭地方に橋掛りをもつ独立した能の舞台を有する神社は16あり、橋掛りをもたない舞台を有する神社は68、その他として集会所を兼ねた施設のある所は20以上に及ぶという⁴⁾。これほどの多くの舞台が一地域に存在するのは佐渡⁵⁾と若狭ぐらいであると思われる。能の舞台数が当時の能の隆盛を物語っている。現在では能が演じられる神社は数少なくなったが、若狭地方の演能の専門集団である倉座⁶⁾を中心に、その伝統が受け継がれている。今回の調査対象は橋掛りをもつ独立した能の舞台を有する神社である①八幡神社（小浜市男山）、②若狭姫神社（小浜市遠敷）、③若宮八幡神社（小浜市生守）、④熊野神社（小浜市金屋）、⑤黒駒神社（小浜市飯盛）、⑥佐伎治神社（高浜町宮崎）、⑦日枝神社（大飯町本郷）、⑧大飯神社（大飯町山田）、⑨熊野神社（名田庄村三重）、⑩苅

* 建設工学科 建築学専攻

田彦神社（名田庄村小倉）、⑪河原神社（上中町上野木）、⑫熊野神社（上中町井ノ口）、⑬日枝神社（上中町安賀里）、⑭須部神社（上中町末野）、⑮前川神社（三方町南前川町）、⑯弥美神社（美浜町宮代）の16箇所である。それらの中で近年、神事能（一人翁を含む）を催している神社は⑩、⑬、⑭、⑮、⑯である。「拾椎雑話」⁷⁾や「稚狭考」⁸⁾の文献で17世紀末～18世紀の江戸期における若狭地方の能の隆盛を知ることができ、①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑬、⑮、⑯の14箇所は「稚狭考」に神事能奉納の神社として記されている。

3. 小浜市の能の舞台

若狭地方における能の舞台は氏子により奉納されたものが多いが、八幡神社の能の舞台は藩主の庇護のもとで奉納されたといわれている⁹⁾。現存する舞台の鏡板の裏面に嘉永5年（1852）奉納と奉納者名が記されている。「若越宝鑑」¹⁰⁾の神社鳥瞰図（明治32年）に本殿及び周辺の空間構成、建築構成が現在の姿にほぼ近い様子が描かれている。八幡神社は市中にかかわらず静寂な環境にあり、舞台は神楽殿等の建物、木々、石垣に囲まれた観能空間としての広場に面し、本殿、参道、鳥居が並ぶ軸線と矩折れに配されている。舞台と62度の角度をなす橋掛りは楽屋と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺き、橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。可動式床の脇座は演能時に設置する。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成、舞台床下3個・橋掛り床下1個の素焼瓶の設置、舞台・橋掛り床回り羽目板構成はいずれも音響効果¹¹⁾を考慮した造形となっている。鏡板に豪壮な老松、切戸口・貴人口壁面に竹が描かれている。柱頭組物はなく、建築の妻飾として木連格子、懸魚があるのみで全体として簡素ではあるが、堂々とした中に優美さを漂わせる造形となっている。

若狭姫神社は古来より若狭国の二の宮として信仰され、境内の鬱蒼とした木々や本殿等の凛とした古建築群の構成¹²⁾の中に舞台はある。「若越宝鑑」によると、建築構成はほぼ同じであるが、舞台の配置は現在と異なっている。舞台は本殿、随神門、木々に囲まれた観能空間としての空地に面し、本殿、神門、随神門、鳥居と並ぶ軸線と矩折れに配されている。舞台と70度の角度をなす橋掛りはその奥の引き戸より橋掛りと平行な通路で舞台裏の楽屋と連絡している。この平面形式は佐渡の能舞台に散見される。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、檜皮葺き、橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。可動式床の脇座の痕跡がある。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は音響効果を考慮した造形となっている。鏡板に穏やかな老松に竹、切戸口壁面に竹が描かれている。柱頭組物はなく、建築の妻飾として木連格子、懸魚、隅木小口に飾り金物があるのみで全体として簡素ではあるが、優美な造形となっている。

若宮八幡神社は山際の竹林に隣接し、舞台は木々や建物群に囲まれた観能空間として広くはない空地に面し、本殿、鳥居と同軸線上に並んでいる。舞台と78度の角度をなす橋掛りは土間のままで楽屋の機能を有する長床と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。脇座はない。竿縁天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となっている。鏡板はなく背景の自然と視覚的に連続するが、後座後の一本の柱が結界を示して舞台の正面性を表現している。舞台床回りに羽目板がなく、舞台を軽やかにしている。

柱頭の組物、建築の妻飾はなく、簡素な姿を示している。

熊野神社（小浜市）は隣家が迫る細長い敷地にあり、希少な正面平入形式の舞台は本殿、参道、鳥居と並ぶ軸線と矩折れに配され、舞台正面と右に観能空間としての空地があり、見所の機能をもつ長床に対面している。舞台と78度の角度をなす橋掛りは楽屋と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。可動式床の脇座を設置している。竿縁天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となっている。鏡板には老松と竹が同一平面上に描かれている。柱頭組物は舟肘木である。建築の妻飾として懸魚や組物の舟肘木が旋律を奏でるように繰り返し使われているが、全体として簡素な造形である。

黒駒神社は集落奥の山際にあり、参道と直交して本殿、舞台、鳥居が同軸線上に並び、本殿と対面する舞台は木々や建物に囲まれた観能空間として広くはない空地に面している。舞台と65度の角度をなす橋掛りは楽屋や脇見所の機能を有する長床と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、銅板葺きである。脇座はない。化粧屋根裏天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となり、後座後に柱が一本あるのみで鏡板がなく開放的な舞台となっている。柱頭組物はなく、建築の妻飾として木連格子、懸魚、垂木・隅木小口に飾り金物があるのみで全体として簡素ではあるが、優美な作風となっている。

4. 大飯郡・遠敷郡・三方郡の能の舞台

佐伎治神社は若狭湾を近くに望む高台にあり、藩主の庇護や氏子の奉納により若狭地方において有数の規模を誇っている¹³⁾。本殿と軸線をずらして対面している舞台は、建物群や木々で囲まれた観能空間としての玉砂利が敷き詰められた広場に面している。舞台と50度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡している。文化3年(1806)の舞台再造営の棟札が残っている。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺き、橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。可動式床の脇座を設置している。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は音響効果を考慮した造形となっている。渦が彫られた妻梁上にある墓股に花卉が彫られている。鏡板に豪壮な老松、切戸口壁面に竹が描かれている。柱頭組物はないが、建築の妻飾として虹梁大瓶束、懸魚、隅木小口に飾り金物があり、全体として荘重な造形となっている。

日枝神社は本郷地区中心の木々が鬱蒼とした平地にある。本殿と軸線をずらして対面している舞台正面に十分な観能空間としての空地があり、建物群で三方を囲われているが閉鎖的ではない。舞台と115度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡している。現在の舞台は昭和52年竣工であり¹⁴⁾、天保11年(1840)の舞台改築の棟札が残っている。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺き、橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。脇座はない。舞台と後座は化粧屋根裏天井と格天井の構成による一体空間となっている。舞台床回りに羽目板が施されず入母屋造の瓦葺きの重厚さに比して簡素な造形となっている。鏡板に能画は描かれていない。柱頭組物は舟肘木で、墓股に渦や巴が彫られている。建築の妻飾として木連格子、懸魚があり、瓦役物など全体として重厚な作風となっている。

大飯神社は風致林を背とする山際にあり、本殿と僅か軸線をずらして対面する舞台正面と左に参集

所や木々に囲まれた観能空間としての空地がある。舞台と90度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する参集所と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、金属板葺きである。脇座はない。竿縁天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となっている。舞台床回りに羽目板は施されず、鏡板に能画は描かれていない。柱頭組物は舟肘木であるが、建築の妻飾として懸魚があるのみでしつくいを施した簡素な造形となっている。

熊野神社（名田庄）は長い参道奥の山際にあり、参道の延長に本殿、拝殿、舞台は同軸線上に並び、本殿と対面する舞台左に木々に囲まれた観能空間としての空地がある。舞台と74度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する社務所と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、銅板葺きである。脇座はない。化粧屋根裏天井と格天井の構成により後座は舞台と一体空間となっている。舞台床回りには羽目板が施されているが、鏡板、柱頭組物もなく建築の妻飾として懸魚があるのみで全体として簡素な造形となっている。

荻田彦神社は南川と堂本川の合流を望む高台にある。本殿、舞台、鳥居は同軸線上に並び、本殿と対面する舞台左に観能空間としての広場がある。舞台と64度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する社務所と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺き、橋掛りは桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、金属板葺きである。脇座はなく、舞台柱は細い。化粧屋根裏天井と竿縁天井の構成により後座は舞台と一体空間となっている。舞台床回りに羽目板が施されている。建築の妻飾として虹梁大瓶束、臺股、懸魚がしつくい面に浮び上がる堂々とした入母屋であるが、鏡板、柱頭組物もなく全体として重厚さを軽減した造形となっている。

河原神社は田園風景が広がる集落の中心にある。舞台は本殿と並列する特異な配置であり、舞台正面に観能空間としての広場がある。舞台と74度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡し、床は土間のままである。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、金属板葺きである。脇座はない。化粧屋根裏天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となっている。舞台床回りには羽目板が施され、柱頭組物は舟肘木で構成され、建築の妻飾として懸魚があるが、鏡板はなく全体として簡素な造形となっている。

熊野神社（上中町）は集落を通る参道奥の山際にあり、本殿、拝所、舞台は同軸線上に並び、本殿と対面する舞台左に木々に囲まれた観能空間としての空地がある。舞台と72度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡している。舞台は昭和24年（1949）の再建である¹⁵⁾。舞台は桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。脇座はない。舞台と後座は竿縁天井の構成による一体空間で後座の一部を床に見立てて落掛けを設けている。鏡板に能画が描かれ、舞台床回りには羽目板が施されている。建築の妻飾として懸魚、妻梁・木鼻には渦の彫物があるが、柱頭組物はなく、しつくいを施した全体として簡素な造形である。

日枝神社（上中町）は集落の境の山際にあり、参道の延長に本殿、舞台、鳥居が同軸線上に並び、本殿と対面する舞台正面と左に観能空間としての空地がある。舞台と75度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡している。舞台に嘉永6年（1853）の棟札による記録がある¹⁶⁾。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。脇座はなく、舞台柱は細い。化粧屋根裏天井の連続構成により後座は舞台と一体空間となっ

ている。鏡板はなく、舞台床回りに羽目板が施されている。建築の妻飾として懸魚があり、妻梁には渦の彫物が施されているが、柱頭組物はなく、全体として簡素な造形である。

須部神社は田園風景が広がる高台にあり、本殿、拝殿、神門の並ぶ軸線と矩折れに配された舞台正面と左に斜面、休憩所、木々に囲まれた観能空間としての空地がある。舞台と90度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する休憩所と連絡している。舞台は昭和6年(1931)の建立である¹⁷⁾。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、銅板葺きである。脇座はない。格天井による連続構成で後座は舞台と一体空間となっている。舞台床回りに羽目板が施され、鏡板には老松が岩とともに描かれている。舞台に長押、しっくいが施され、建築の妻飾として木連格子、懸魚、隅木小口に飾り金物、柱頭組物に舟肘木があり、端正な造形である。

前川神社は階段が連なる長い参道奥の山際にあり、本殿、参道、鳥居が並ぶ軸線とずれて対面する舞台正面と左に木々に囲まれた観能空間としての空地がある。舞台と90度の角度をなす橋掛りはその裏側の楽屋と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、銅板葺きである。脇座はない。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成、舞台床回りの羽目板は音響効果を考慮した造形となっている。鏡板に能画は描かれず、建築の妻飾、柱頭組物はなく、簡素な造形である。

弥美神社は集落を通る参道奥の高台にあり、本殿、拝殿、参道、鳥居が並ぶ軸線とずれて対面する舞台正面と左に客席の機能を有する階段を含む観能空間としての空地がある。舞台と90度の角度をなす橋掛りは楽屋の機能を有する長床と連絡している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺き、橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺きである。脇座はない。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底、片流の構成は舞台床回りの羽目板とともに音響効果を考慮した造形となっている。鏡板に現代風の抽象化された能画が描かれている。柱頭組物の大斗肘木、建築の妻飾としての懸魚があり、全体として端正な造形である。

5. まとめ

舞台の間口(柱間)と奥行の寸法(表一1)について、間口は16,0尺~16,3尺の間に11箇所、奥行は13,0尺~13,1尺の間に6箇所と集中している。間口が奥行より広い舞台が13箇所である。

①、②、⑥、⑪、⑮、⑯は間口と奥行がほぼ同寸法であり、⑯以外は奥行より間口が僅かに広い。

舞台と橋掛りの角度(表一1)について、若狭地方において舞台と橋掛りの角度を90度にとっているのを4箇所見受けられるが、全て橋掛りの全長は短い。⑦は115度の角度で特異な舞台である。

⑥を除く他の舞台は西本願寺奥能舞台¹⁸⁾より橋掛り角度は大きい。

水引梁内法開口の寸法(表一1)について、6,8尺~7,5尺に9箇所と集中している。水引梁内法開口の縦横比をみると、1,50~2,41の間であり、②が1,50で開口部対角線の角度は34度、⑭が2,41で開口部対角線の角度は23度である。西本願寺奥能舞台は30度、表能舞台は28度である。

舞台床高(表一1)について、舞台の平面規模とは必ずしも関わりはなく、観能における視点の位置よりむしろ舞台全体の造形による構成要素のひとつとして影響を及ぼしている。

能の舞台の空間構成(図一1~4)について、(1)本殿正面に能の舞台を配したもの、(2)本

殿左に能の舞台を配したもの、(3) 本殿右に能の舞台を配したものと3グループに分類できる。

(1) は③、⑤、⑦、⑧、⑨、⑩、⑫、⑬、(2) は①、②、⑥、⑪、⑭、⑮、⑯、(3) は④である。本殿と能舞台の対面形式から、[1] 本殿軸線上で対面、[2] 本殿軸線をずれて対面、[3] 本殿軸線と矩折れに対面、[4] 本殿軸線と並列に分類でき、[1] 形式は③、⑤、⑨、⑩、⑫、⑬、[2] 形式は⑥、⑦、⑧、⑮、⑯、[3] 形式は①、②、④、⑭、[4] 形式は⑪である。本殿に正面を向けている舞台は11箇所であって本殿との結び付きの強い配置関係を示している。若狭地方では観能空間としてその多くは舞台周囲の空地、広場や階段がその機能を担い、見所としての建築は少なく、楽屋の機能を有する長床や集会所の一部が、その用途に供せられている。若狭地方の舞台の妻飾は入母屋造の一部にあるのみで、切妻造ではほとんど見受けられない。墓股や梁に彫物が施されている舞台は一部のみで、若狭地方の舞台はほとんど装飾はなく全体として簡素な造形となっている。

謝辞 舞台実測、資料閲覧に際しては上記調査神社の宮司、総代各位に多大な協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

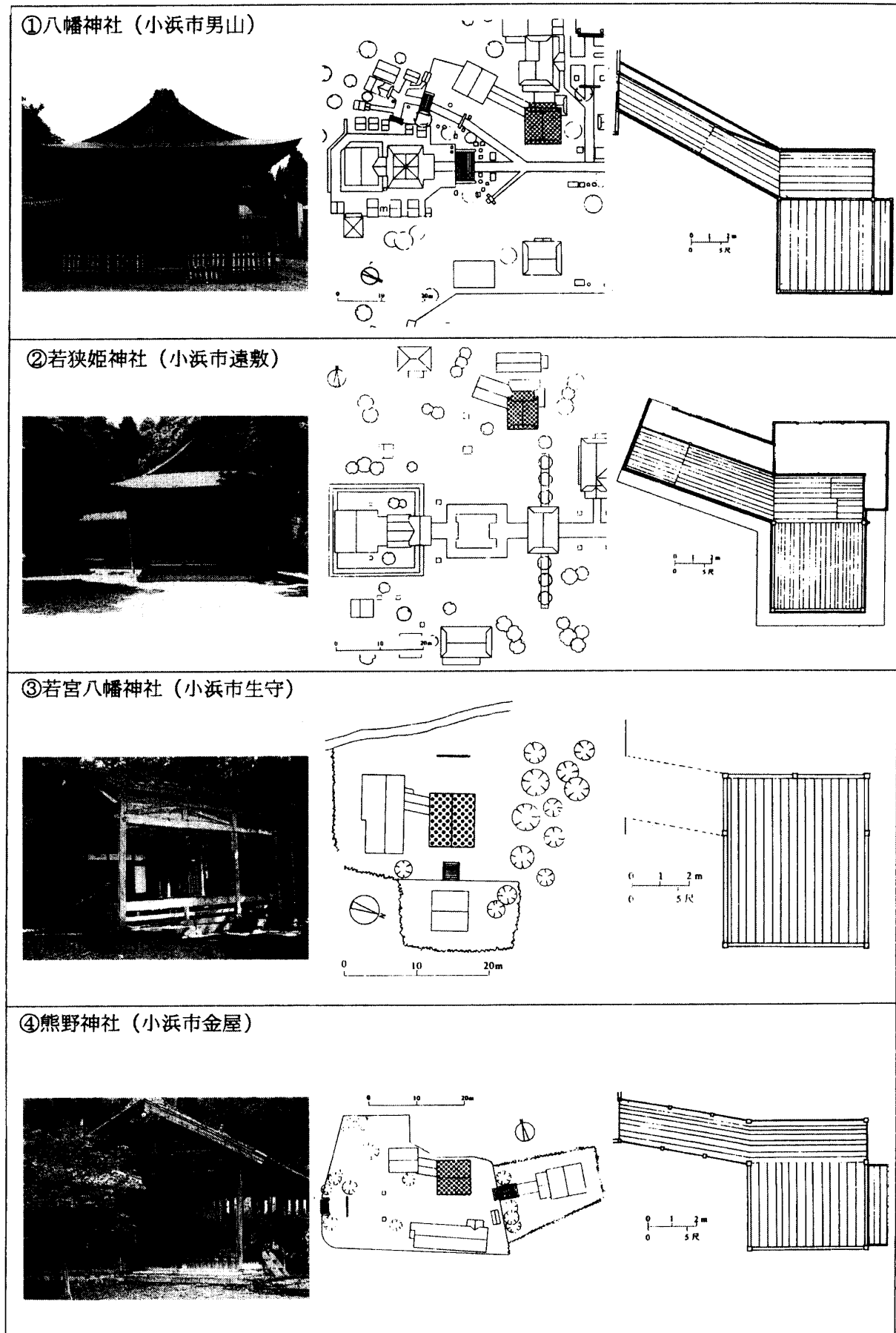
註

- 1) 金春國雄「能への誘い」淡交社 1980 p18~23
- 2) 須田悦生「若狭猿楽の研究」三弥井書店 1992 p161~169
- 3) 山崎楽堂「能舞台」(野上豊一郎編「能楽全書」第4巻 東京創元社 1979)
- 4) 宮田浅夫「若狭における能舞台について」研究雑誌16,18 福井県立若狭高等学校 1983,1986
- 5) 新潟県教育委員会「佐渡の能舞台」1993
- 6) 2) に同じ
- 7) 巻4 小浜の項、福井県郷土誌懇談会「拾稚雑話・稚狭考」1974
- 8) 第5 散楽祭礼の項、7) に同じ
- 9) 「八幡神社誌」八幡神社社務所 1971 に京極忠高公が寛永2年(1625)に寄進したと記述がある
- 10) 渡辺市太郎「若越宝鑑」歴史図書社 1973
- 11) 3) に同じ
- 12) 福井県教育委員会「近世社寺建築緊急調査報告書」1986
- 13) 福井県神社庁「福井県神社誌」1994
- 14) 12) に同じ
- 15) 12) に同じ
- 16) 若狭安賀里史編纂委員会「若狭安賀里史」1994
- 17) 恵比須大神奉賛会「えびす社社記」
- 18) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942

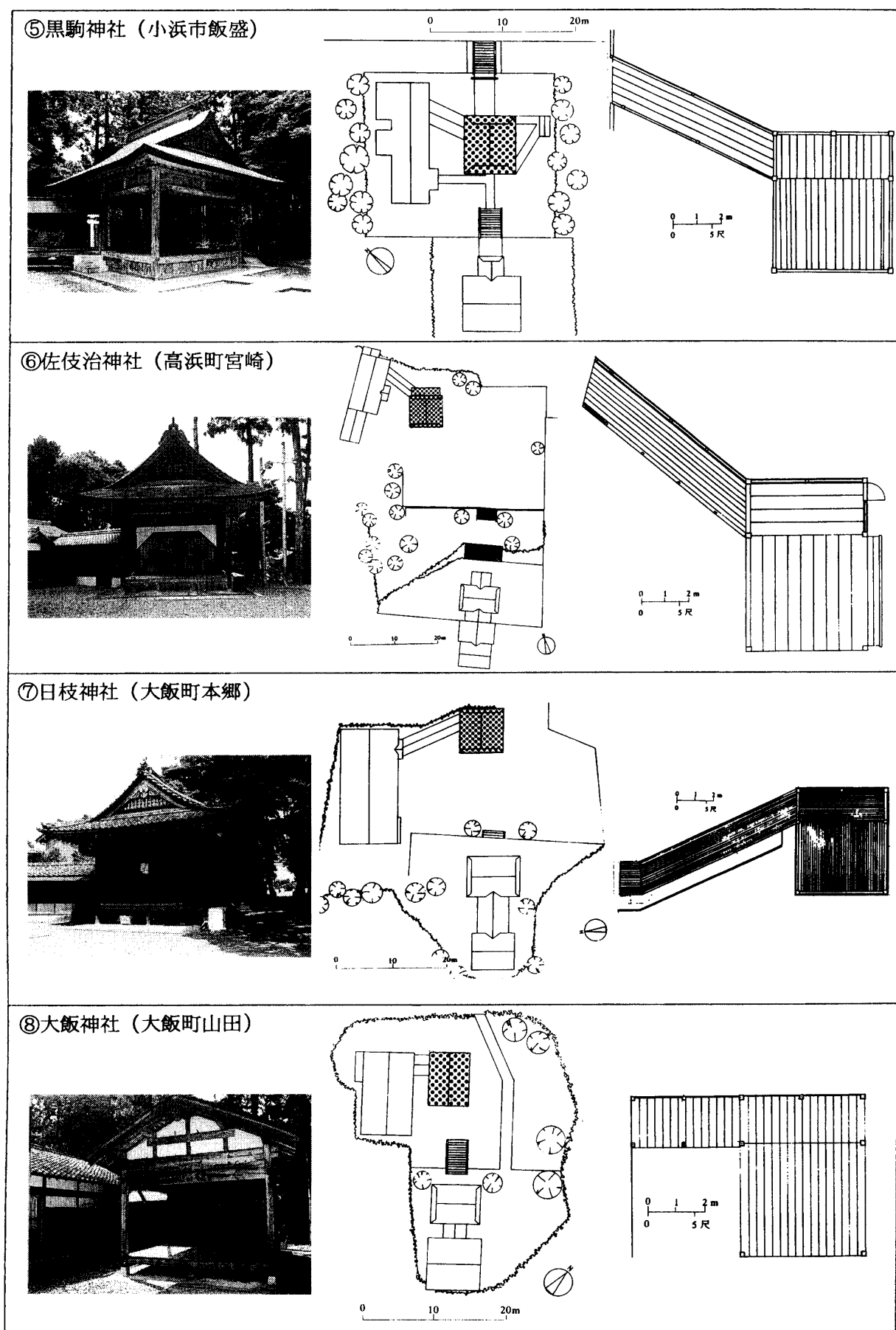
表一 能の舞台主要寸法

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
舞台間口	17,0	16,2	16,3	16,0	16,1	16,0	16,0	14,1	16,2	15,0	14,6	16,0	16,2	16,3	15,0	16,0
舞台奥行	17,0	16,1	13,1	12,0	13,0	16,1	13,0	13,1	12,1	12,0	14,6	18,0	13,0	13,0	15,0	16,2
後座奥行	8,7	8,7	6,5	5,9	6,5	7,7	6,0	5,5	6,0	6,0	7,9	3,0	6,5	6,5	5,6	6,5
舞台床高	2,5	2,1	2,1	2,5	2,6	2,4	3,0	2,0	2,1	2,9	2,2	2,2	2,3	2,5	1,9	1,6
水引梁高	10,4	10,8	7,0	7,1	7,5	9,2	7,7	7,0	8,6	6,9	7,7	7,1	7,3	6,8	7,4	8,0
舞台柱太	0,66	0,69	0,53	0,61	0,66	0,66	0,66	0,55	0,58	0,51	0,60	0,59	0,51	0,50	0,59	0,71
構掛り幅	8,0	7,8	6,5	5,8	6,1	6,1	5,6	5,5	5,8	5,4	7,7	4,1	3,9	6,5	6,5	6,6
構掛り長	34,5	28,9	9,8	18,2	24,9	24,9	35,7	12,5	18,8	14,2	18,9	16,5	11,8	15,3	5,5	11,4

(単位: 尺)

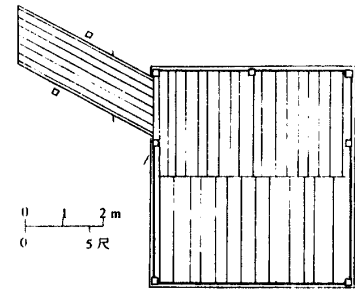
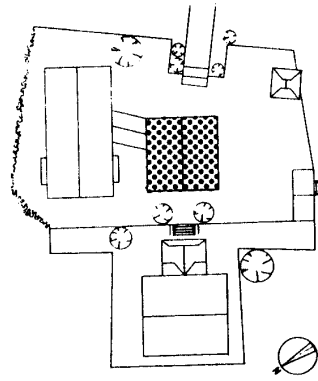
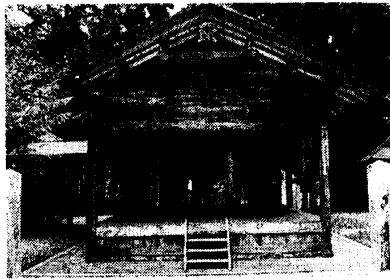


図一 1 能の舞台配置図・平面図（1）

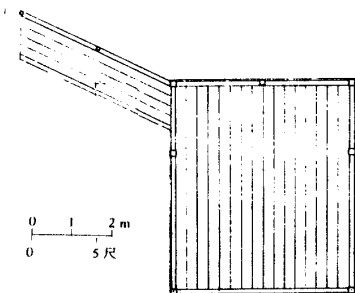
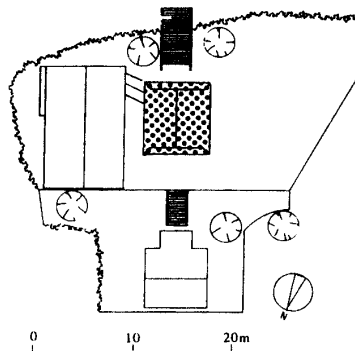


図一 2 能の舞台配置図・平面図（2）

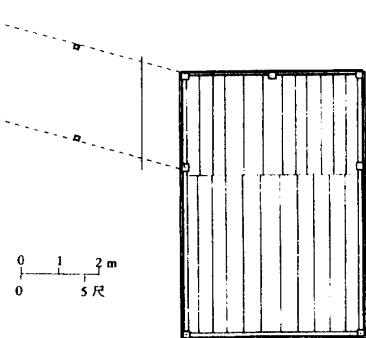
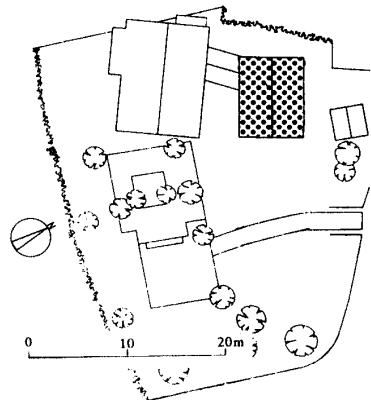
⑨熊野神社（名田庄村三重）



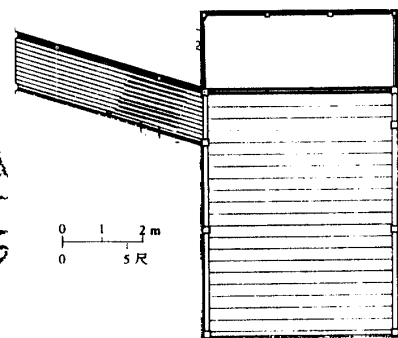
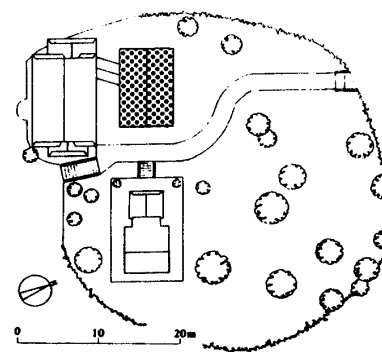
⑩苅田彦神社（名田庄村小倉）



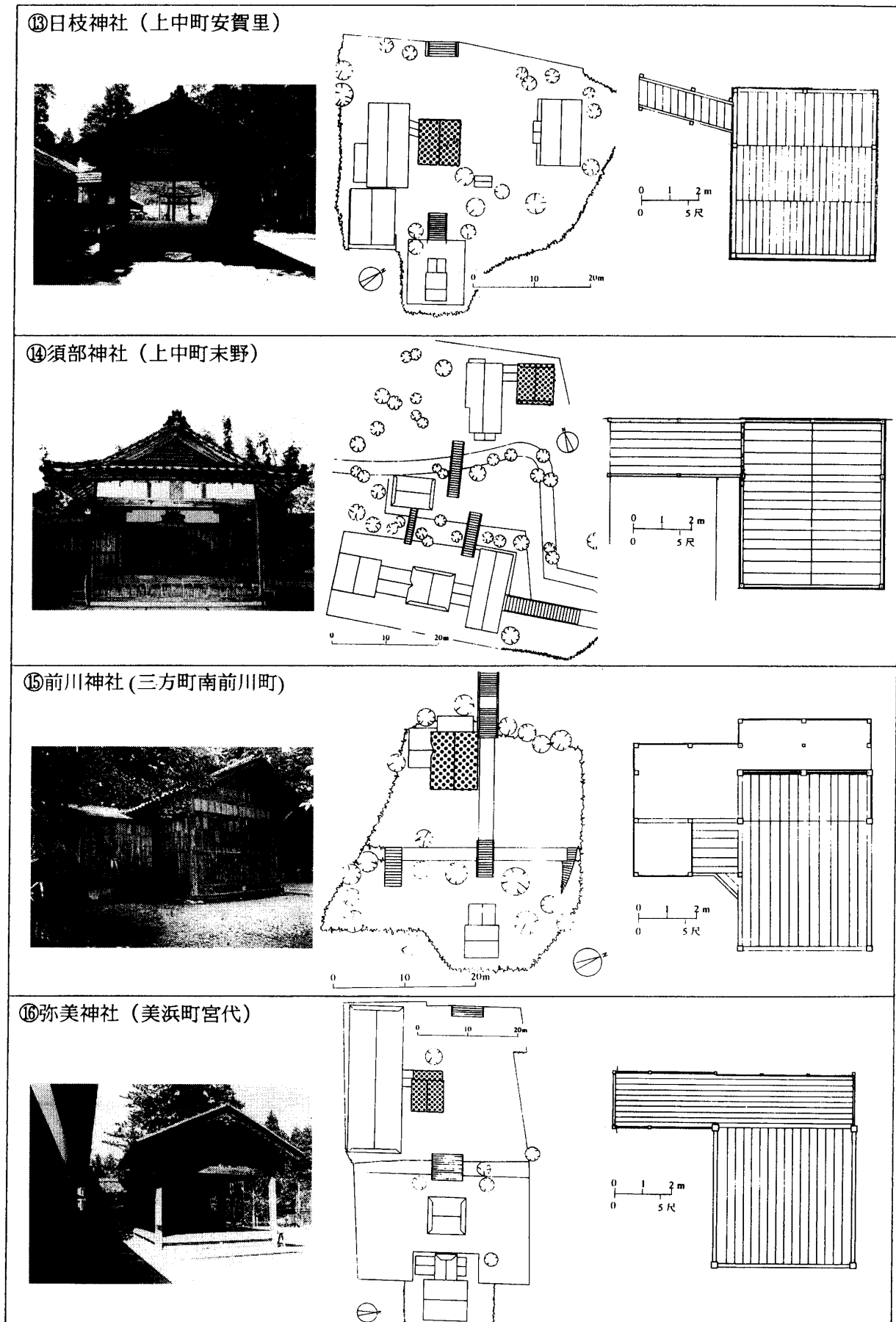
⑪河原神社（上中町上野木）



⑫熊野神社（上中町井ノ口）



図一 3 能の舞台配置図・平面図（3）



図一 4 能の舞台配置図・平面図（4）

（平成12年12月5日受理）